

記載の楽器編成は楽譜上のものであり、実際の演奏時には異なる場合があります。何卒ご了承ください。

ヨハネス・ブラームス (1833 ~ 1897)

## ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 作品25 (シェーンベルクによる管弦楽版)

ブラームスのピアノ四重奏曲第1番は、彼がウィーンに移る前年に作った曲で、代表作の1つである。

この曲はシェーンベルクがオーケストラに編曲したことで有名である。シェーンベルクは無調音楽、とりわけ12音技法を用いた作曲で知られるが、その一方で先人たちによる伝統を重んじていた。中でもブラームスは彼にとって大きな存在であり、その作曲技法を自らの規範としている。そしてこのピアノ四重奏曲第1番の編曲は、彼と親しい指揮者のオットー・クレンペラーの提案によって行われた。シェーンベルクはブラームスのこの曲を愛していたと述べており、さらに彼の言葉からは、オーケストラ編曲によりこの曲の魅力を伝えようとしていた意図が伺えよう。

**第1楽章**は短調による不安げな旋律と、ゆったりとした旋律を主題とするソナタ形式である。この2つの主題はシェーンベルクによる巧みなオーケストレーションによって、豊かに彩られている。

**第2楽章**は3つの部分からなる。第1部分では短調のリズミカルな旋律が現れ、中間部では長調に変わり快活な曲想になる。そして第1部分の再現を経て、コーダでは中間部の素材が再び現れて静かに閉じられる。この楽章では木管楽器や弦楽器が中心となるが、弱音器をつけた金管楽器が時おり用いられ、音色に変化を与える。

**第3楽章**は3拍子の緩徐楽章。優美で明るい主題で始まるが、中間部では行進曲風の生き生きとした曲想に変わる。後者では金管楽器や打楽器が活躍し、特にグロッケンシュピールが輝かしい響きをもたらす。そしてこの中間部ののち冒頭の旋律が再現されるが、その際には激しい表情を見せる。その後曲は落ち着きを取り戻し、静謐の中に消え入るように閉じられる。

**第4楽章**はブラームスが「ジプシー風のロンド」と名付けており、短調による快活な旋律で幕を開ける。ここではシロフォンやタンバリンが、ジプシー音楽の賑やかさを作り出す。楽章の途中では遅いテンポによる情熱的な旋律がたびたび登場するが、最後は急速なテンポになり、冒頭旋律によって勢いよく終わる。

佐野旭司 TEXT by Akitsugu Sano

作曲：ブラームスの原曲：1861年 シェーンベルクによる編曲：1937年5月2日～9月19日

初演：1938年5月7日、ロサンゼルス、オットー・クレンペラー指揮、フィルハーモニック管弦楽団

編成：フルート3(ピッコロ持替1)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替1)、小クラリネット1、クラリネット2(バス・クラリネット持替1)、ファゴット3(コントラバス・ファゴット持替1)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、バス・テューバ1、ティンパニ、グロッケンシュピール、シロフォン、大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タンバリン、弦5部

7/13 SAT. 14 SUN.

アントニン・ドヴォルザーク (1841～1904)

**交響曲 第7番 二短調 作品70**

今日では、ドヴォルザークと言えばとても親しみやすい曲をたくさん書いていた人というイメージが抱かれるであろう。だが、彼の作品には、野心作にも事欠かない。今回の演奏会で取り上げられる交響曲第7番二短調も、そうした作品の一つである。この曲を野心作にしているのは、ドヴォルザークが1880年代に置かれていた状況に他ならない。

1880年代には、オーストリア＝ハンガリー二重帝国に住んでいたチェコ人とドイツ人（ドイツ語を母語とする住民）との対立が深刻化していた。チェコ語を母語とするチェコ人の住民が経済力を高めるとともに、帝国内での政治的な発言力も次第に高めていったからだ。彼らが求めていたのは、帝国内でチェコ人の自治権を高めることだった。その一環として、ボヘミアやモラヴィアの役所などの公的機関でドイツ語と同様にチェコ語を用いる権利を求めて実現させたが、同地のドイツ人は不満を抱いた。この結果、プラハなどのボヘミアやモラヴィアの都市部で民族対立が激化しただけではなく、帝国の首都であったウィーンやオーストリア＝ハンガリー二重帝国以外のドイツ語圏の都市でも反チェコ人感情が高まった。

ドヴォルザークは、芸術音楽の多様な語法を貪欲に取り入れつつ、スラヴ諸民族の間で傳承されていた民俗音楽を利用して、民族的出自を十全に表現した作品を多数発表していた。そのため、帝国内でのチェコ人とドイツ人との間の民族対立に巻き込まれてしまう。1880年に作曲された交響曲第6番二長調は、初演が予定されていたウィーンで楽団員によって演奏を拒否された。第3楽章では、ボヘミアのチェコ人が傳承していた農民舞曲フリアントを用いていたからだ。ウィーンのみならず他のドイツ語圏の都市でも、彼の作品の上演が忌避された。だが、ドヴォルザークはチェコ人としての民族的出自を創作の場で重視する姿勢を堅持した。

しかし、その一方で、イギリスではドヴォルザークの作品が高く評価されており、ロンドンへ数度招待されて交響曲第6番や《スターバト・マーテル》などの指揮を行った。これがきっかけとなって、1884年6月にはフィルハーモニー協会の名誉会員に推薦され、新しい交響曲も委嘱された。この新曲こそが、今回の演奏会で取り上げられる交響曲第7番に他ならない。この交響曲を書く際には、ブラームスの交響曲第3番へ長調からも大きな影響を受けていた。チェコ人の歴史を想起させる音素材を用いながらも、この種の民族的な要素を従来の作品以上に構築性の高い楽曲構造において統合することを目指したのである。

## 第1楽章 アレグロ・マエストーソ

二短調。8分の6拍子。ソナタ形式。第1主題末尾の旋法的で特徴的なリズム音型が、全曲にわたって重要な役割を果たしている。変ロ長調の副次主題は、前年に作曲した劇的序曲《フス教徒》でも引用されている、13世紀頃に成立したチェコ語の単旋歌《聖ヴァーツラフ》を想起させる。

## 第2楽章 ポコ・アダージョ

ハ長調。4分の4拍子。三部形式。コラル風旋律に導入された歌謡的な旋律に基づく第一の部分と、ハ短調の激しい調子で始まったのちに多様な転調が繰り広げてゆく中間部とのコントラストが印象的である。なお、ドヴォルザークは、改訂時に39小節分を割愛した。

## 第3楽章 スケルツォ：ヴィヴァーチェ

二短調。4分の6拍子。三部形式。交響曲第6番と同様に、4分の6拍子の枠組の中で2+2+2と3+3のリズムが交替するフリアントのリズムが用いられている。ただし、本楽章では、歌謡的で対位法的な性格が強調されている。ト長調のゆったりとしたトリオののちに、フリアントに回帰する。

## 第4楽章 フィナーレ：アレグロ

二短調。2分の2拍子。ソナタ形式。第1主題は、増4度の音程を含む重苦しいものである。それとは対照的に、イ長調で奏でられる副次主題は明るく、民謡を彷彿とさせる。この楽章でもまた、《フス教徒》で用いた素材が用いられている。

中村 真 TEXT by Makoto Nakamura

作曲：1884年12月～1885年3月

初演：1885年4月22日、ロンドン・セント・ジェームズ・ホール、ドヴォルザーク指揮、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団

編成：フルート2(ピッコロ持替1)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦5部